

ニカラグア算数教育活動報告

吉田 崇

(16-1, ニカラグア, 小学校教諭, 横浜市立飯田北小学校教諭)

1 ニカラグア国の概要について

(1) ニカラグア国の位置等

中米にあり、北側はホンジュラス、南側はコスタリカ、東側にカリブ海、西側に太平洋にはさまれた熱帯性気候の国である。中米では最大の面積を誇る。首都はマナグア。

(2) 人口及び宗教, 言語

人口は 563 万人 (2004 年) である (外務省ホームページより)。宗教はキリスト教カトリックである。言語はスペイン語が主であるが、カリブ側一部地域に置いて少数民族であるミスキート族がミスキート語を話す。

(3) ニカラグアの経済状況

正式通貨はコルドバ・オロであるが一般的にはペソを用いることが多い。1 人当たりの GDP 867 ドル (2005 年) である。主要な産業は農牧業 (コーヒー, 牛肉, さとうきび, とうもろこし等) である (外務省ホームページより)。

経済的にはハイチ国に次ぐ最貧国である。また、貧富の差がとても大きい。

(4) ニカラグアの主要な歴史的状況及び最近までの状況

1936 年より 1979 年までソモサ大統領による独裁政権が続くが、1979 年 7 月のサンディニスタ革命によりサンディニスタ政権が樹立。政権は急速に左傾化するものの、アメリカのレーガン、キューバのカストロの影響による内戦が 10 年ほど行われる。その後、1990 年に国連などによる国際監視の下に大統領選挙がなされ、親米保守派のチャモロ政権樹立。この政権によりニカラグアは平和構築, 民主化, 経済自由化などの大変革を遂げる。1 時期は経済成長率が中米第 1 位になったほどである。しかしながら、その後の大型地震, ハリケーンなどによりニカラグアはある意味崩壊してしまい、未だに国内は不安定, 混乱状態にある。ニカラグア人は言う, 「この国は貧乏なのではない, 貧乏になってしまった国だ」と。昨年 (2006 年) の 11 月に大統領選挙が行われ自由党のボラーニョス政権からサンディニスタ党のオルテガ氏の政権に移る。就任式は 2007 年 1 月。サンディニスタ (共産) 党が勝利したらアメリカは援助等を退くと表明しているが、その後のニカラグアがどうなっていくかはまだわからない (一部外務省ホームページ参考)。

2 ニカラグアでの隊員活動について

(1) 要請概要から

配属先において、授業計画の立案、教材教具の作成、授業実践を全学年担当教員とともに行う。また、県教育事務所算数指導主事と連携し、県・市教育研修において研究授業を同僚とともに行う。隊員の勤務時間は1日8時間。校内で時間勤務し、特に低学年を中心に算数の授業を担当とともに受け持つ。残り3時間を県教育委員会指導主事との会議または自宅研修に当てる。隊員としての立場は技術助言者。

(2) 配属先について

配属先はジョンFケネディ小学校である。日本政府が数年前に建てた学校で、日本以外にも様々な国や機関から援助を受けているニカラグアの中でも恵まれた学校といってよい。冷房付のパソコン室があり、その中にパソコンが20台ほど設置されていて、一部はインターネット接続もされている。

午前中は校舎が小学校として利用され、午後からは日本で言う中学校と高校、夜間学校となっている。生徒数は小学校だけで420名ほどで全部合わせると1000人を超えるどちらかといえば規模の大きい学校である。

ジョンFケネディという校名の由来は、アメリカ大統領ジョンFケネディ時代にその援助で創立したのが由来となっているようだ。少しではあるがケネディ一族との交流もある。

学校の印象は私にとってとてもよい。様々な援助から成り立っている学校だからなのか、協力隊員として派遣された私をととても歓迎してくれた。校長が数学教員ということもあり、算数教育への理解も深い。一般的に協力隊員はよく物資をその配属先からねだられることを耳にするが、それはなく他の先生方も教授法などの技術面の協力を望む姿が多く見受けられた。

(3) 実際の活動について

① 2004年8月から2005年1月までの活動概要

派遣当初はまず、ニカラグアの生活や学校のスタイル、ニカラグアの教育のスタイル等に慣れるために3ヶ月間をめぐりに見学のための活動を行った。そこで派遣当初に学校から指定されたカウンターパートではなく、これからの活動によりふさわしいカウンターパートの選出も自ら行った。活動期間が1年9ヶ月と短いため、学校の教員の中でも算数教育や授業により熱心な教員をカウンターパートとして選んだ。そのカウンターパートとは2005年1月にホンジュラスで行われたJICA主催の広域研修に参加した。その研修では、筑波大附属小学校から細水先生が講師となり研修したが、この先のニカラグアでの活動のためになるだけでなく、日本に帰ってからの自分のためにもなる研修であった。

また、その3ヶ月間で、レオン市に同じ要請内容で派遣された3人と共に行うセミナーを開催するためにレオン市の教育委員会とも連絡を取り、その計画立案も行った。まずニカラグアの算数の授業の問題点や課題を見つけることから始めた。そ

して、2005 年 1 月末にレオン市の小学校の低学年担当の先生方を対象にセミナーを行った。

② 2005 年 2 月から 2005 年 12 月まで

1 月にセミナーを行い、これからという時の 2 月にニカラグアの先生方による賃上げストライキが 1 ヶ月ほど行われてしまった。(背景にはニカラグアでの教員達の地位の低さ、賃金の低さがある。教員 1 人当たりの給料は 70 ドル程度、中産階級で 300 ドルが平均と言われているのでとても低いことがわかる。)これは痛手であった。セミナーそのものを系統立てて計画を練ったものであったし、何よりも参加者達の意識の低下が心配された。そのセミナーは月 1 回のペースで 7 月まで行った。対象者は約 100 人、3 つの会場に分けて 3 日間ずつ行った。

一方、配属先の学校の方では、カウンターパートを低学年の担任になるように学校にお願いした。そして、2 年生の授業を中心に低学年の算数の授業での活動を行った。私がマンパワーとなり、つまり T1 となり授業を進めていく方法もあるが、帰国後のことを考え、つながっていけるようにあくまでも T2 として授業のサポート役、先生方への助言、子どもたちへの個別支援に徹した活動を行った。その活動と平行して適宜学校の先生方へのセミナーもカウンターパートと協力して行った。

また、セミナーを行ったメンバー達と算数問題集テキストづくりも同時並行で行った。これは子どもたちに配るのではなく、セミナー参加者を対象に系統だった算数の授業を展開していけるように、また、ニカラグアの算数の指導要領になるべく即して、日本のやり方も加えたものを作った。系統内容は後述のセミナー計画にだいたい即している。

③ 2006 年 1 月から帰国までの活動概要

算数問題集テキストができあがったのでその使い方などについてのセミナーも行い、テキストとセミナーがなるべくリンクしていけるようにした。約 300 冊作ったが、費用は JICA の隊員活動支援経費と自助努力促進のためにほんの一部をレオン市教育委員会にしてもらった。

配属先での活動も続ける一方、個人的に他の地域での算数活動も広げた。首都マナグアのスラム街で活動する隊員からの要請があり、ストリートチルドレン達への基礎教育支援としての算数力をつけるための活動を行った。配属先の校長の許可をもらい一週間に 2, 3 日程度、環境、経済面などあらゆる方向から見ても生活困難、学習困難な児童たち(ストリートチルドレン)に対して、学校へ行っても学習について行けるように、途中で学校をやめたりしないように、想いを込めながら青空教室ではあったが授業を行った。

④ レオン市で行ったセミナーについて

○ セミナーを行うまでの経緯

- ・ 要請には、「県教育事務所算数指導主事と連携し、県・市教育研修において研究授業を同僚とともに行う。」とあるが、レオン市教育省からは特に何の連絡

もなし。

- ・ 11月になってから隊員の側から呼びかけたことによって、セミナー計画の話になる。
- ・ 隊員が自分の配属先学校での授業見学などをベースに算数教育における問題点を出し、それを元にセミナーの内容について話し合った。
- ・ 教育省からは、セミナーに関する仕事を行う、指導主事を一人配置してもらった。
- ・ 隊員内で、セミナー計画案をつくった上で、CP及び担当指導主事で、セミナーの計画を行った。
- ・ 内容的に、年度始めの1月から7月まで、月1回ずつ行うこととし、内容は、小学1年生の計算分野の基礎に絞った。

○ セミナーの概要

- ・ 目的…わかりやすく楽しい授業づくりを通して、基礎計算力の向上をめざす。
- ・ 対象…レオン市内公立小学校1，2年生担当者
- ・ 運営方法…レオン市教育省(MECD)との連携による運営

○ セミナー計画（表1）

1月	9までの数、数の合成・分解
2月	たし算（繰り上がりなし）
3月	ひき算（繰り下がりなし）
4月	19までの数、3つの数の計算
5月	たし算（繰り上がり）
6月	ひき算（繰り下がり）
7月	99までの数

○ 具体的な研修内容

- ・ 単元導入時の授業の進め方とそのポイントについて
- ・ 系統立てられた練習問題について
- ・ 楽しい学習ゲームについて
- ・ ディスカッション（第5回以降）
- ・ 十進法に基づく計算法の紹介
- ・ 「数の合成・分解」の導入
- ・ 低コストで抑える教材作り
- ・ 参加者の声を反映した研修会づくり

○ セミナーの成果

- ・ 参加者の授業に対する意識の変化

- ・ カウンターパートの意識向上
- ・ 配属された学校の教職員の意識の向上
- ・ 研修会の機会設定
- ・ 配属校以外の先生方とのふれあい
- ・ チームとして活動内容・研修内容の広がり
- ・ 研修会を運営する上でのカウンターパートがいない。(続いていかない。)
- ・ 研修会参加者のアフターケアなどできない。
- ・ 先生方の理解・定着度への疑問と限界
- ・ 1, 2年担任以外の配属校先生方の不参加
- ・ 運営上の問題

⑤ 活動上の成果及び反省点

- ・ C P との授業計画をするための打ち合わせ時間がなかなかとれない (カウンターパートが副業を行っているため)
- ・ 他の学年の授業への参加
- ・ 授業数の確保 (ストライキがあったり無計画な学校運営のせいだったり)
- ・ 物資不足 (日本と比べてしまうと・・・)
- ・ 子どもの学力定着 (1年9ヶ月ではなかなか成果は見えません)
- ・ もっと教材作成に力を入れるべきだった (時間があるようでなかった)
- ・ 小学校教員として世界の様々な教育状況について学ぶことができた
- ・ T 1 として授業をあまりしなかったけれども、もっとやってもよかったのではないか (他の隊員活動報告をふまえて)
- ・ 子どもがかわいいのは世界中同じですね
- ・ 自分がその学校に行ったことにより、その学校の先生達の授業に対する意識向上があがったのではないか

⑥ 配属先の学校への助言, 提言

- ・ 子どもたち中心の授業をするために、時間、教材、言葉、気持ちが大切です
- ・ 「教えること」は「待つこと」です
- ・ 授業は子どもたちが間違えるためにあります
- ・ 算数研究グループを作ることをすすめ
- ・ 算数問題集テキストを十分に活用してください

⑦ 後任隊員へのメッセージ

- ・ 算数の授業への協力活動を続けてください
- ・ 算数研究グループの組織化を試みてください
- ・ 先生方対象に算数の基礎教育セミナーを開いてください

(4) J I C A 及び文部科学省への助言, 提言

① 長期的なビジョンをもつての隊員活動の要請

私たち現職参加の隊員達は任期延長ができないうえに一般隊員に加えて活動期間

も短く設定されています。他の分野もそうかもしれませんが特に教育分野については1, 2年間でなかなか成果の見えるものではありません。私たちが作りあげたものを礎にして間を空けることなく積み上げていかなければ、私たちの行った活動はメッキの様にはがれ落ちてしまうことでしょう。せめて5年ないし10年のビジョンをもって要請に当たって欲しいです。後任隊員を自分が活動している間に来ようようにしてもらえるのがベストです。(2007年1月現在後任が決まったという報告はなし。決まったら私に伝えてくれるようJICAニカラグア事務所調整員には伝えてあります。)近い国ならば、私が長期休みごとに行ってボランティアをすることも可能ですが、ニカラグアはそういう風にして行くにはコスト的にも時間的にも厳しい距離にある国です。プロフェッショナルである現職教員を隊員として要請するに当たって以上のようなことをふまえていただければ、大きな費用をかけて派遣される私たちの活動が少しでも無駄にならず実になっていくと思います。

② 帰国隊員へのサポート

私が帰国してから、1週間で現場復帰でした。自治体にもよりますが、横浜市では職場異動が原則となっています。日本とは環境面などあらゆるところが全く違う国から帰って来て1週間での現場復帰はかなり厳しいものがありました。現在(2006年5月末から)、疲労性によるうつ病になってしまい、自分の意志とは反対に職場で働けなくなっています。(2007年1月に復帰予定)教育委員会指定の精神科医とも面接しましたが、私の様な例が多く見受けられるとのことでした。せっかく派遣されておきながら私の様な状態になったのでは、国にとっても、自治体にとっても学校にとっても大きな損失になると考えます。例を挙げるとイラク派遣された自衛隊は派遣後に3ヶ月の休暇があると聞きます。自衛隊とはまた違った性質のものであるとは思いますが、開発途上国と言う過酷な環境の中で活動し、帰国する私たちのことをもう少し考えて頂ければ、現職派遣制度が更にお互いの国にとって質の高いものになりえるのではないのでしょうか。よりよい方向への改善を求めます。

③ 現職参加の隊員を帰国後どう活かしていくか

(i) 教え子達とのつながり

私は6年生を卒業させてからの派遣でした。帰国後その子どもたちは中学3年生になっていて、中学校の総合学習の中で国際協力の分野のテーマを取り上げた子どもたちと良い情報交換ができました。その子たちが高校、大学と進学、成長するにつれて私を良い材料として利用してもらえればと思っています。

(ii) 帰国後の職場異動とその後

自治体にもよりますが、私の所属している横浜市では派遣後は職場異動が原則となっています。帰国後、学校現場にすぐに活かせることを考えると異動しない方が、派遣中のつながりから考えてもよいのではないかと思います。もちろん、人それぞれ、学校それぞれのやり方が違いますので一概に言えませんが、異動しないほうがうまくリンクできるのではないかと思います。また、貴重な経験をさ

せて頂いた私たちにとって、その経験をどう日本の子どもたちに、学校に活かしていくかを自分自身はもちろん、JICA及び文部科学省、教育委員会と考えて行ければと思っています。

